
透明なろうそく

三日月麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明なろうそく

【Nコード】

N9310K

【作者名】

三日月キリン

【あらすじ】

導入部。若干の自己紹介あり。

第壱話

「なあ、将来子供に、『どうして人を殺しちゃいけないの？』って聞かれたとき、お前らどうやって答える？」

こんな思春期真っ盛りの質問をしてしまう彼の名前は、田坂 登（17）である。

「お前そういう哲学っぽい話好きだよな。」

彼の名は井上 勇司（17）。田坂の小学生からの友達である。

「あんたに子供ができるかも謎だしね。」

彼女は湯之元 早苗（16）。彼らは三人とても仲良しで、教室の窓際でよくとりとめのない話をしている。

そして僕。僕のことはどうでも良いか。

“どうして人を殺してはいけないか”という疑問。ありふれているが、その質問をしている子供を見たことは一度もない。それは日本が平和だからかもしれない。その質問がされると言うことは、子供が人の死に触れたときだろうから。それでももし、その質問をされたとしたら、どう答えれば良いだろう。正解を一度も教わっていない問題の答えを考えるのは、やはり面倒だ。

『自分がされたら嫌なことは、他人にはいけないから』

と言うのは、一番楽な答えだ。でも、この答えには既に『殺されて

も良いと思っている人は他人を殺してもいいのか?』言う反対意見が用意されている。子供がこんな質問をするだろうかと言う疑問は棚上げに、そもそもそんな人間はめったにいない。

ちなみに、僕は誰かに殺されたい

第貳話

“誰か僕を殺してくれ”

そんなどうでもいいことを考えてしまう。

いつからだったか、僕は世の中に対して何も期待しなくなった。

そして、気づいたら世の中に僕に期待する人はいなくなってしまうっていた。

いや、正確には親がまだ期待しているかもしれない。

それはそうか、僕を育てるために何百万もつぎ込んだんだし、その甲斐あってか、僕はそこその人間になった。

偏差値六十位の高校に入学し、そこでも偏差値六十位。

運動も割りと得意。

だめなところと言えば、コミュニケーション能力くらいだろうか。

それでも普通にしゃべる友達くらいはいる。

でも、僕はそれだけの人間だ。

努力と言うものをしなかったせいだろうか。

いや、しなかったわけではない。

そこそこの努力でそこその結果が得られた。

それで満足だった。そこで満足してはいけなかったのかもしれない。

もっと何かを欲しなければならなかったのだ。

欲しなければ、世の中は何も与えてくれない。

そして今は、欲しても何も与えてくれなくなってしまった。

そんな虚無感や孤独感を感じるとき。僕は思うのである。

“誰か僕を殺してくれ”

と・・・。

別に、死にたいと言うわけではない。

でも、生きていてもつまらない。

現代社会における自殺者増加には、僕のような人間が増えたせいではないかと考えている。

つまり、何かに追い詰められたから死ぬのではなく、

自らが空虚になった瞬間、ふと死んで見る人間が増えたのではないか。

そんなことを考えているうちに、家についた。

今日は深夜の時間帯のバラエティが、ゴールデンで三時間スペシャルになるのだ。

透明なろうそく 第参話

僕の一日はブログの更新で終わる。

今日見たバラエティ番組の感想。ニュースに対する意見。

自分の感じたことを感じたままにただ書き綴る

。誰かに読んでもらいたいわけでもない。

ただ、一日中溜め込んだものを吐き出す、いわば排便のようなものだ。

ふと、新着記事欄が目に入る。誰かが新たにブログを更新したのだ。

『私は誰かを殺したい。』

ずいぶんとセンセーショナルなタイトルだ。

リアルに警察がお家にやってきますよと思いつつ、日記を読んでもみる。

タイトル「私は誰かを殺したい」

と言っても、単純に殺人をしたいと言うわけではなくてですね、

それほどまでの激情を自分が感じる相手と言うものがほしいと言うわけです。

殺人って言うのは、当然違法行為なんです。

で、法律って言うのは、

人間が作った社会秩序を維持するためのルールであって、

いわば人間が人間足りえる部分と言うか、理性の象徴なんですよ。それを破るほどの激情。

うらみ、つらみ、etc.。

でもそれらの感情は、おおむね愛情を伴っていると言うか、

愛情から派生した感情なんです。

例えば、愛する人を殺された恨みで殺人を犯すとか、自らを愛しているから、自分を追い詰めた相手がにくくて仕方ないとか、

そう言った愛情から派生した感情だと思っくんですよ。

仮に今私がめっちゃくちゃいじめられたとしても、

殺したいと言うほど相手を憎めない。

それほど自分が好きじゃないから、

つらくなったら自殺と言う方向に行ってしまうと思っくんですよね。

ああ、だめだ。愛情に飢えているな私。

僕は驚いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9310k/>

透明なろうそく

2011年10月7日01時00分発行